
白と黒

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒

【Nコード】

N5668Z

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

狂気の斧男はこの界隈にいる。守口真人はそれを知っているし、友人の江藤魁もそうだ。斧を持った殺人鬼は、彼らの住む藤宮市のどこかに潜んでいる。それは紛れもない事実だ。

搜索は始まった。

真人の決意

狂気の斧男はこの界限にいる。守口真人はそれを知っているし、友人の江藤魁えとうかいもそうだ。斧を持った殺人鬼は、この藤宮市のどこかに潜んでいる。それは紛れもない事実だ。

搜索は始まった。

斧男、アックスマンは突然藤宮市とその周辺近隣の市町を騒がしてきた。斧男についてわかっているのは、男女問わず、老若男女誰彼構わず殺すということ。凶器は斧だということ。そして男だということ。以上だった。

真人が中学生になった頃だ。第一の殺人事件が藤宮市金須野区域で起こった。場所は真人の家から八キロほど離れた場所で、真人もあまり向かわない場所だった。遺体は斧で何度も何度も刺されていて、酷い有様だったらしい。

それを皮切りに、恐怖が始まった。斧男は蛮行を重ね、真人が高校二年生になるまでに六人殺した。模倣犯の可能性はなかった。特有の殺し方は本人でしか再現できないものだとは断定されたからだ。その四人は金須野区で起こった事件ではないが、どれも藤宮市で起こったことだった。

真人は思った。これは由々しき問題だと。

真人の決意 2

「で、お前はこれ以上斧野郎を野放しにしておくわけにはいかないから、奴を捕まえるために俺に協力してくれ、と。そういうことですか」

「うん。頼むよ魁」

「ばか」魁は冷たく返した。「俺はそういうやばいことはしたくねえんだよ」

友人である江藤魁は高校に入ってから付き合いだが、不思議と馬が合うのかいつも一緒にいて、今では一番仲がいい生徒だった。

「頼むって。魁だってこれ以上殺人事件が起きるのは嫌だろ？」

「いや、俺は自分に被害が及ばなければ良いんだ。いいか、奴は今まで金須野と周りの町を襲ってきた。この金須野地区でも殺人はあった。この藤宮市全体が奴らのテリトリーで、そして奴はたぶんこの市に住んでいるんだ。だいたい一七八？に総人口が約十四万。確率的に考えれば俺が死ぬのは十四万分の一。勿論これは市内全域が範囲の場合だけど。遭遇する確率は一パーセントどころじゃないのな。大丈夫。俺が死ぬ心配はないっていうことです」

真人は思う。これがほとんどの人間の考え方だろう。もう何人も死んでいるというのに、自分の周りには何万人も人がいる。だが、宝くじに当選するよりも高い確率で殺されるということをわかっていないのだろうか。

「無理強いはいしないさ。できれば協力してくれれば有り難いってだけで」

「なんで急にそんな正義感に目覚めたんだよ」

「なんとなく。ただ、これ以上殺人事件がこの市内で起きるのってただ事じゃないよなって思ってた」

「警察に任せるのが一番だと思いますけどねえ？」

「警察が今までなにしていたって話さ」

「そうはいつでも、俺らが出向いてもどうにもならんよ」魁は話は終わりだといわんばかりに前を向いてしまった。

魁の協力が得られるとは思っていなかった。それはたぶん、魁が非協力というわけではなく、真人が本気で殺人鬼を捕まえるなんて無茶をやるなんて思っていないからだろ。

だから、独りでやる。最初は全て独りから始まるのだ。そういうものなんだ。

最初は放課後に行動に移すつもりだった。しかし、今の真人は滾っていた。放課後まで待てる余裕はない。それに夕方から探索というのはどうも危険な感じがする。すぐに夜になってしまふし。なので真人は保健室に赴き、風邪だと偽ると許可をもらって学校を出た。まずはどうすればいいか。時計を確認する。まだ正午にもなっていない。時間は十分ある。

殺人鬼の痕跡を見つける。そうだ！ だがどうやって？ そんなものは警察が調べているに決まっているじゃないか。

警察に情報を求めるという選択肢があればいいのだが、残念ながら警察は高校生の探偵気取りに情報を流すほど甘い組織ではない。警察に知り合いでもいればいいのだが、あいにくそんなコネクションはない。

やはり魁の協力が欲しい。魁はいつもなんだかやる気のなさそうな人間に見えるが、興味さえ持てば誰よりも凄い。

深く息をつく。まずは殺人のあった現場に行ってみよう。これは基本だ。一番最近殺された人の現場に向かおう。真人は自転車を走らせた。

現場にはすぐについた。二ヶ月前に起きたことだった。一人の老婆が昼さなか、ミスターアックスマンより斧の洗礼を受けた。杖をついた老婆の周りには誰もいなかったのだろう。背後から斧の一撃。それから再び。さらにもう一撃。それから止めに頭部に一撃。

頭が痛い。想像するだけで不愉快になる。こんな痛ましいこ

とはない。何故自分よりもずっと弱い存在に凶器を持ってまで襲いかかることができるのだろう。信じがたい。鬼畜の所行だ。

道路のすぐ隣は線路になっている。場所を見るに、どうみても殺人を行うには目立つ。周りは住宅が多いし、全く人気がないという場所では全然ない。

斧男は神出鬼没だと言われている。まさか。化け物じゃあるまいし。

アスファルトに滲む血痕の後はもう微かになっているが、確かにあった。

風が強く吹いてきた。真人は身を震わせた。寒さからではない。なんだか怖くなってきたのだ。斧男が近くにいるような想像をしてしまう。早いところこの場を去ったほうがよさそうだな気がして、真人は自転車にまたがった。去る間際、何か得体の知れない殺気のような、今まで感じたこともない怪しい気配を感じた気がして、真人は自転車を強く漕いだ。

次に向かったのは真人の知っているもう一つの殺害現場で、もう四年も前に起こった事件の現場だ。斧男は背後から不意打ちで殺すのも好きだが、堂々と姿を見せて真正面から頭をかち割るのもお得意だ。四十二歳のアルコール中毒の男はそうやって殺された。日頃家族に暴力を振るって疎まれていた存在だったようで、家族にとっては斧男は救い主のようなものかもしれない。だが殺人は殺人で、極悪にもかち割った頭をさらに何度も何度も斧を振るっている。飛び散った頭蓋、脳が辺りに散乱したことだろう。

現場付近はのどかな田舎風景で、畑へと続く舗装されていない道が殺された場所だった。

わからない。このこと先ほどの場所を、点でつないでみるが、共通点はさっぱり見えない。五キロほど離れている場所だ。どうしてこんなところなのか。斧男は単独犯で、この藤宮市に住んでいる可能性が濃厚だ。

真人は首を振る。わからないことだらけだ。殺害現場の関連性は藤宮市ということだけ。しかし場所は離れている。無差別殺害だと警察は断定しているし、そうなのだろう。周期的に殺人を起こすというわけではない。殺人と殺人の間の時間に法則性はない。

今日はここまでにしておこう。明日にはいい知恵もわくかもしれない。

まだ夕方になったばかりだ。帰るには早いかもしれないが、真人は殺害現場に行くことで斧男のことを身近に感じてしまい、怖くなってしまうのだ。

ミスターキラー

連続殺人鬼斧男は、三ヶ月ぶりに獲物を狩ろうかと思っていた。

彼はそうなのだが、いつも思い立ったが吉日生活という言葉のように、突然思い立つと行動を起こす、ということが実に多い。彼は殺人鬼ではあるが、普段は温厚で、とてもよくできた好人物であると周囲から評価されている。

斧男はマスクを被るが、一応である。彼はその気になれば誰にも見つからずに対象を死に至らしめることができるし、事実今まで見つかったことはほとんどない。一回だけへまをやらかして子供に見つかったことがあるが、その子供はやむなく殺した。気が乗らなかった。というのも、殺人衝動なく殺すという行為は実に狂った行為だと彼は思っているからだ。全ての事柄がそうだ。仕事もそう。車に乗るのもそう。人間は、ノリに乗っていないと行けない。そうしないと、全てがつまらなく感じてしまつて、何もかもが空しくなってしまう。暗く、空虚。それなら死んだ方がましだ。

殺人も楽しみの一つである。だがこれはかなり気を遣う娯楽だ。まず、決定的なことがある。これは法に触れるということ。そして世間一般的に、これはもつとも重い罪の一つだと思われている。

だから人目に触れるのは絶対に避ける。そして決定的な証拠を残さない。この二つは自分の能力を使えば、容易に解決できた。だから、斧男は今まで警察に捕まらなかった。

この藤宮市は狭い。だから、慎重に、警戒しながら一杯娯楽を楽しむ。この能力を使って。つまるところ人生は楽しむためにあるのだから。

斧を手にする。愛用の斧は手入れを怠らない。血は刃物を駄目にするから。

さて、準備はできた。もうじき日が暮れる。夜になるとなんだかモチベーションが保てなくなる。その前に出かけようとしてしよう。き

つと楽しい夜になる。見たいテレビは予約した。……遊びの時間だ。

接近者

次の日、一面での連続殺人鬼再びの文字に、宮崎市民は当然、恐怖のどん底へとたたき落とされた。何より今までとはスパンが短い。いつもは一度殺人があつてから次の殺人までに半年以上はあつた。しかし今度は三ヶ月だ。

警察は総動員で躍起になっていて、市内いたるところにパトカーが見えた。彼らもプライドや体裁を守るために必死になっていた。何が何でも斧男を逮捕する。市民も眠れない夜が続きそうだった。しかし何故、こんな大した規模でもない市街に凶悪な殺人鬼がいて、そして何故今もなお捕まっていないのか。住民も警察も疑問だった。

「な、言つたろう？ あいつは野放しにはできない存在だよ」 真人は魁に言った。

「ああ。確かに。この町、ちょっとした有名所になっちゃったもん。連続殺人鬼が住んでいるかもしれない町だもん」

「俺とお前で見つけてやろうぜ」

魁は顔をしかめ、茶色い髪をいじった。

「そりゃあ、協力はしてやりたいけどさ……実際、どうすればいいっていうんだよ？ 前も言つたけど、俺達ができることなんてとくに警察がやってるんだぞ」

魁の言うことは至極もつともだと思ふ。昨日のことともそうだ。現場にいつて何か手がかりを掴むなんて自分にはできない。しかし、また殺人が起きた。警察は必死だろうが、結局また犯人を特定することはできないだろう。そんな気がする。今までがそうだったように。

「だけどこのまま任せっぱなしなんて俺にはできないよ」

「好きにしるよ」

いいさ。お前がそういうのなら、俺一人で奴を、ミスターキラ―を捕まえてやる。

今回は昨日の夕刻に起きた殺人事件現場にきた。まだ新しい事件現場なので、警察の数が多く、現場には近づけそうにない。テープも張られている。本格的だ。

殺されたのは十八歳の男子高校生で、藤宮市在住ではなく、学校帰りに買い物に寄っただけのようだ。背後から斧で滅多刺し。哀れな話だ。

ここにいっても自分は用はないのだろう。警察に任せ、警察が見つけれないのなら、誰も見つけられない。それが当たり前だ。その場を去る。

魁の言うとおりだ。もうこのことは考えまい。殺された人間は哀れだが、運がなかったのだと割る切ることだ。

黒髪の少女が立っていてこちらに微笑みかけている。最初は誰か別の人を見ているのかと思った。しかし、どうみても目線のほうを向いていたので、真人は困惑した。彼女を知り合いの誰か、クラスの女生徒の一人かと思い出してみたが、クラスの生徒にも今までの顔見知りにも該当者はいなかった。

「君、斧男を自分で捕まえようとしてるんでしょ？」

超能力者か何かだろうか。

「君は誰？」真人は尋ねる。

「同じ目的を持っていて一人だよ。もう一度聞くけど、斧男を捕まえようとしてるんでしょ？」

彼女はよく見ると自分とほとんど同年くらいに見える。一体彼女が何者なのか知らないが、こちらの意図はわかっているようだ。何故なのかはわからないが、そういうことなのだろう。

「そうだよ。だけどそんなのは無理そうだから、大人しく家に帰るよ」

「無理じゃないよ」

「何だつて？」

「あたしもあいつの正体を知っている。斧男は人間じゃない」

どうも変な相手に絡まれたのではないかと真人は思いつつも、過去にきいた噂話を思い出した。斧男は別世界からきた化け物だと。だから、警察には捕まえられないのだと。

「人間じゃない？」

「ミスターキラーは怪物なの。この世界に巣くう化けものたちの一人。それを倒すのは、あたしやあなたのような異端者の使命なんだよ」

背後では警察たちの喋る声が聞こえてくる。風は優しく吹いていた。この女は何者なのかかわかないが、守口真人は、不意に、強力な味方を得たのでは？ という希望のような気持ちが芽生えた。

それから、変人と関わりたいないという拒絶感も。

それで結局、関わりにならなくないという気持ちが優ったようだ。真人は自転車に乗ると、何も言わず少女に背を向けて走り去った。

青江柑那の場合

青江柑那は藤宮市に住む高校二年生で、守口真人と同一年である。彼女も、守口真人と同じように、斧男の蛮行をこのまま放っておくわけにはいけないと思う、正義に燃える女子高校生だった。見た目は普通で、可愛いと思う者もいるだろうし、少々野暮ったいと思う者もいるだろう。そんな女子高校生。勉強はあまりできない。落ちこぼれだ。だが隣のクラスにはハンサムだと大半の女子に慕われている彼氏もいて、彼女は楽しい日々を送っている。

斧男は酷い。あの鬼畜は必ず地獄に葬ってやるべきだ。そう思う。警察はどうせ今回も捕まえられないだろう。両親も言っている。警察は当てにならないと。

「だけど柑那、危険だよ」

交際期間二ヶ月の杉崎亮は言う。

「わかってるけど、でもね、絶対斧男は捕まえて、罰を受けないといけないと思う。だって、そうじゃないと、殺された人たちが可哀想」

「柑那がやることじゃないって」

「別に、亮君はいいよ。励ましてくれるだけで。あたし一人の問題だから」

「俺ってそんなに頼りない？ まあいいや。気をつけて」

恋人はそう言って柑那の肩を軽くもんだ。

彼女はわかってる。交際相手は自分が本気で斧男を捕まえようなんてしてはいないと思っているということ。だけどそれはそれでいい。亮は柑那よりも背が高いが、線は細い。腕力に自信があるというタイプではさらさらない。亮にはあまり危険な場所に行って欲しくない。必要なときに側にいて、その優しい顔で微笑んでくれていればいい。危険なことをするのは自分で十分だ。

斧男を必ずこの手で見つけ出し、逮捕してやる。

「そうだ。今日帰りに喫茶店でも行こうよ」
「ごめん、ちょっと用があるの。本当ごめん」

闇雲に探っていてもいいだろうと青江柑那はまず、一昨日斧男が人を殺めた現場にスクーターで向かった。警察の姿こそなかったものの、テープが貼られ、立ち入り禁止になっている。

予想していたことだが、柑那は失望しなかった。これでいい。斧男の殺しには何か意味があると思っている者もいる。人によっては、実は正義の味方なのではないかとあまりにもばかばかしい推測をする者もいる。柑那にはわかつていて、斧男はただの快樂殺人鬼。自分の本能のまま、赴くままに殺人を繰り返す。危険な存在。斧男がそういう人物だということは手に取るようにわかる。

そして柑那は絶対に、斧男を自分の手で裁いてやるつもりだった。断罪の方法は、すでに色々考えある。

まずは斧男を見つけなくては。話はそれからだ。柑那は早速取りかかることにした。

青江柑那は人とは違う能力を持っている。

彼女がその黒い瞳を青く輝かせると、世界が変異する。表の世界一般的な現実世界から、中間世界へと変貌する。

中間世界は見た目は異質だ。人間達が生活する表の世界とは違い、この裏の世界は不可思議な世界である。人間はいないが怪物はいる。彼らは中間世界の一般的な住人としてその世界を跋扈している。

中間世界はモノクロの世界だが地形も建物の形も大差ない。少し奥に、大きな腹の出た緑色の醜悪な生き物の姿が見える。トロルのような外見に柑那は不愉快な気分になる。

柑那は知っている。斧男は自分と同じ、表と中間の世界を自由に行き来することができる。そういう能力を持っている。ゲートを開くことができるという者は異質だ。普通の人間とは違うことができるのだから。

中間の世界に長く干渉するのはまずい。もうすでに、連中達が気配をかぎつけて、集まり始めている。捕まったら最後、死ぬまでいたぶり、その後に臓腑を貪るという怪物も中にはいるのだ。

事件現場を見る。白黒の世界の中、うつすらと別の色を持つ靴跡。間違いない。斧男の靴跡だ。

「見つけたよ、亮」柑那はほくそ笑む。警察が見つけれられるわけがないのだ。奴はすぐに現実世界から中間世界へと自分の存在を転移することができるのだから。何もしらない一般人なんかには、絶対に捕まる相手ではないのだ。

柑那は笑みを止めることができない。斧男の明確な足跡は、おそらく自分を斧男の罫まで連れて行くことだろう。慌てることはない。ゆっくりと、確実に取りかかろう。しかし、これだけの力があるにせよ、やはり一人は危険だなと彼女は思った。

協力者

この藤宮市というのは呪われた町なのではないかと真人は思う。

殺人鬼が住み着き、そして神隠しがある。斧男とは全く違う。行方不明者は死体すら見つからないという事件がほんの数年前にあった。相手は女子中学生ばかり三人いなくなった。斧男の殺人と神隠し、どちらが恐ろしいだろうか。

魁の家でくつろいでいた真人は、大きくため息をついた。

「俺、この事件に首を突っ込まないことにするよ」

「随分諦めが早いじゃないか」

「斧男には関わらないことにするよ。無意味に自分を危険な目に晒したくないしさ」

「あつそう。じゃあもう連続殺人鬼のことは考えるのをやめて、ゲームでもしようぜ。新作仕入れたんだ。二本もだ」

魁はその活発そうな容姿とは裏腹に家でテレビゲームが大好きで、よく真人は魁のゲームに付き合わされる。真人もゲームが嫌いではないので、魁の家に行くときよくゲームをする。

「どんなゲーム？」

「ロープレだ。広いマップを歩き回るんだよ。最近の洋ゲーすげえぞ。本当に世界を歩いてるって感じ。自分視点だし」

しばらくテレビ画面に集中していた。

「ゲームの中に行ってみたいな」

突然魁がそう言い、真人はまじまじと魁の顔を見た。

「どうしたんだよ。なんか嫌なことでもあったのか？」

「いや俺、なんかそう思うことが多いんだ。映画でもそうだけど、ファンタジーな世界に自分が入り込めたら、楽しそうだなあって」

「ゲーム脳ってやつかな」

「いや、それ意味違う。俺は想像力豊かなの」

真人は魁の気持ちを理解しないわけではない。確かに、今やって

いるテレビゲームのような広大な原野を旅することができたら、それは実にロマンがあつて面白いものではないか。魔物がたりもして、それらを中世の武具を使ってやつつける。男だったらそんなシチュエーションに憧れるものだ。だからそういった系統のゲームが売れるのだから。

「だけど魁は何か現実逃避をしたいのではないかと真人は思う。何か思い悩んでいることでもあるのではないか。」

聞いてみたいが、単純に聞いたのなら彼は答えてくれないだろう。魁という男のことはまだまだ把握しきれないが、自分の本心になるべく隠す奴だということは知っている。

「じゃあ俺は魔法使いになりたいな」真人は呟いた。

「俺は戦士かな。ごつつい感じじゃなくて、剣を使って鮮やかにモンスターをやつつけるタイプの」

「そんな世界だったら斧男なんてただの雑魚なのに」

「ああ……たぶん某ゲームの殺人鬼みたいにマスク被って襲いかかってくるんだろな。勇者の親父も同じグラフィックなんだぜ」

魁が何を言っているのか真人は理解できない。モンスターか。真人はぼんやり考える。斧男、ミスターキラーは人間かもしれないが、やっていることはまさしくモンスターだ。モンスターは、やつつけないといけない。

再び使命感のようなものを感じ、体中が滾る。この滾りを、魁はわかってくれないだろう。

やつぱり駄目だ。何もできない。何もわからない。だけど、斧男を捜すことは諦められない。諦めてはいけない気がする。

「魁、ちよつと外に出ないか？」

ゲームは盛り上がっている所だった。しかし魁は反対もせず、どこか怪訝な顔をしながらも真人に従ってテレビ画面を消し、共に家を出た。

どうすればいいだろうな。真人は周囲を見回す。魁の家は藤宮市の西南で、ほとんど外れに位置している。過去に殺人があつた現場

も近い。真人はそこに行ってみることにした。

「なあ、どこにいくんだ？」

「黙って俺についてこいよ」

二人は自転車を漕いで殺人現場まで向かった。魁は明らかに乗り気ではないようで、漕ぐ足に力が入っていない。

「おい急げよ」

「どこいくのか言えって」

「ミスターキラの事件現場だよ！」

後ろを向いて返事をしたのでうっかり散歩中の男にぶつかりそうになる。慌ててブレーキを踏む。

犬が威嚇してくる。中型の、柴犬よりも少しだけ大きい犬だ。茶色い斑が混ざってるが、汚らしい色を見ると、雑種かもしれない。

「すいません」

「気をつけるよ。左側通行が基本だぞ」

そういえば右側を走っていることに真人は気付いた。

「おいおい、何してるんだよ」

魁が笑って追い越していく。

「魁のせいだろ」

真人は慌てて追いかけた。「お前が先行してもどこにいくかわかってないんだろが」

「わかるさ。こちら辺で事件現場っていえば、な」

二人はそれから一分もたたずに事件現場に到着した。

場所は、住宅街の車道。殺人は夕方の六時。季節は初夏で、まだうつすらと暗くなりかけている時間帯。そしてこの場所はよく車も通るし、歩行者も少なくない。現に真人と魁がこの場所で立ち止まっている間にも老人や子供、主婦に女子中学生が通りかかったし、車も何台も通過した。

「それで、気は晴れたのかな？ ミスターホームズ」

「まだだよトスン君」

すでに現場には何の痕跡もない。だが、どうしてもここにきて何

かを探らなくてはならないという強い衝動に駆られた。だからきたのだが、何か手がかりが見つかるはずもなかった。

「真人、お前はちよつと執着しすぎなんだよ。事件は俺達で解決するもんじゃないんだよ。俺みたい」

「いいえ。君たちは事件を解決できます」

昨日の女だと真人は顔を見てすぐにわかった。麦わら風の青いレースの帽子に白いフリルの上に下は水玉模様の黄色いスカート。彼女は微笑を浮かべている。

天使の微笑みか、悪魔の嘲笑か。二度も現れるということはどういうことだろうと真人は不思議がった。まるで自分たちがここにくることがわかつているようだ。

「そう、ここに君がくることは予想していたよ」

ああ、彼女は自分よりいくつか年上らしい。物言いの穏やかさから真人はそう思った。顔だけ見れば、高校生でも通用するのだが。

「誰？ 美人」 魁が真人の耳元で聞いてくる。

「昨日も事件現場にいたんだ。誰なのか知らない」 真人はそうささやき返すと、「俺たちに何の用です？」と聞いた。

「私は連続殺人鬼を捕まえるために仲間を集ってるの。昨日もいったけど、君が斧男を捕まえたいなら、お互いに協力したほうがいいと思う。私なら斧男を捕まえるから」

真人と魁は互いに顔を見合わせた。

「本当に？」 魁が言った。「じゃあ勝手に捕まえればいい。一人で」

「それが駄目なの。斧男は普通の人間じゃない。仮に私一人で逮捕できたとしても、簡単に逃げ出してしまう」

「へえ、どうやって？」 魁は明らかに馬鹿にしたような口調だ。彼女のことを全く信じていない様子だ。

「詳しく説明するなら、その条件としてあたしと共同戦線を張ること。駄目なら、何も話さない」

沈黙。真人は彼女の話に興味があった。しかし魁はたぶん、彼女のことを不審がっている。きっとこの話は駄目になる。

「行こうぜ、真人」

やっぱりな。

ここで魁を振り切って彼女のところに行くことはできるが……魁は気に入らないだろう。魁は機嫌を損ねると厄介だ。しばらく嫌な関係が続くかもしれない。どちらを取ることはできないだろうか。

「君たち、狙われるよ？」

「へ？」真人は彼女の言葉に、驚いた。

「邪魔者は消される。君たちもう危ういんだよ。斧男は自分のテリトリーに入った者を消すよ」

「嘘つけ！」

魁の言うとおり。はたたりを決まってる。斧男は自分や魁のことなんて知らない。知らないはずだ。それに、高校生がちよつと調べたからってどうなる？ 危険が及ぶほどのことではないはずだ。「詳しくは説明できないけどね、あいつにはわかってるはず。だから、協力したほうがいいよ」

「馬鹿じゃねえの。行こうぜ、真人」

魁が自転車を漕いで家のほうへと引き返す。真人は逡巡し、後ろ髪を引かれつつも魁の後を追った。

初遭遇

曲がり角を曲がると、魁がゆっくりと走っている。真人は横にいた。

「あの変な女、美人なのに残念。頭がおかしいみたいだ。真あんなのに関わっちゃ駄目だ。初対面じゃないみたいだけど。美人だからってあれはやめとけて」

「魁、俺はあんなの信じてないよ。昨日事件現場で会っただけだし」「上手いこと言っただけ宗教の勧誘にでも誘う気なんだろうさ」

真人が何か言おうとしたが、返事をするどころではなくなった。目の前に、斧を持った男が現れたのだから。頭にマスクを被っている。

変態かもしれない。しかしたぶん、目の前にいるマスクの男は連続殺人鬼、斧男だ。

「斧男！」魁が叫んだ。

二人とも自転車から降りてすぐに方向転回し、逃走を図ろうとした。しかしどういうわけか、壁が眼前に迫っていて、二人は袋小路にいて、壁に激突しそうになった。慌ててブレーキを踏む。

「オマエタチハア！」斧男が叫ぶが、マスク越しで声はくぐもって聞こえた。随分低い声だ。

どうすればいいのか、真人にはわからない。ここは、違う。さつきとは違う……違う場所だ。そんな風に思う。現にあるはずのない場所に壁が現れた。そんなことはありえないのだが。

斧男は異世界より現れる。

ありえない。正気じゃない。

首を振る。今はとにかく、眼前に迫る恐怖そのものを除外するにとだ。

壁なんて乗り越えればいい。少し高いが、越えられないこともなさそうだ。だが斧男はすぐ目の前にいるのだ。壁を登る隙なんてなさそうだ。

真人は斧男が自分に向かって迫ってくるのを視認した。圧倒的な恐怖感は、夜ベッドに入っているとき、斧男に襲われるというイメージをそのまま具現化したもののようで、そして現実には想像以上に恐ろしく、リアルそのものだった。

自転車を盾にした。火事場の馬鹿力か、自転車を軽々と持ち上げて真人は斧男の斧の一撃を防いだ。しかし衝撃は凄まじく、全身に鋭い痺れが走った。

自転車を斧男に投げる。全力で投げつけると、斧男は怯んだようだ。その隙に、真人と魁は斧男をすり抜けて走り去った。自転車に再び乗る暇もなかった。二人は全力で走り、そして曲がり角を右に曲がり、それから……袋小路に詰まった。

「どういうことだ！ 家この先なのに」魁が戸惑いの声を上げた。やっぱりおかしい。真人は考える。これは、普通の世界じゃない。夢でなければ、これは……。

斧男が背後にいる。気配で、わかる。

「もう逃げられないってこと？」

「ざけんなよ」

魁が真人の前に立った。

「おい真人。こいつは俺が食い止める。お前は逃げる」

「馬鹿いえ」

真人は魁の前に立った。

「俺のせいでこんなことになったんだろ？」

斧男は真人を睨みつけている。マスクの開いた穴から覗くその目は、どんよりとしている。冷酷な殺人鬼とは思えないが、だがこいつは殺人鬼なのだ。その斧の一撃を食らってしまえば、人生が終わる。

体格も向こうが上だ。格闘で勝てる相手には到底見えない。どう

すれば勝てるのか、全く検討がつかない。

終わった、かな。

真人が諦観の境地に達していると、斧男が真人に斧を振るってきた。真人の頭部に斧の一撃がめり込もうとしたその直前、魁の蹴りが斧男の横腹にヒットした。

「さあ、逃げるぞ！」

ただどうやって？ 真人は魁の後に走るが、もしこれが自分の予想通りの世界なら、この斧男から逃げることはできないと思う。彼は言ってしまうえば、エルム街の悪夢に出てくるフレディ・クルーガーのような存在だったら？ この世界が、彼の思いのままなら、こちらは逃走も勝利も、絶望的だ。

先ほどの壁をよじ登り、その先へ。真人は人が全くいないことに改めて気付いた。家などは普通にあるのだが、なんとなく妙だ。時間が止まっているかのような、周囲に対する違和。

目の前に突然、壁が現れた。道があったのに、唐突に袋小路へと変わる。壁は、よじ登れる高さではなかった。先ほどの壁の倍はある。

「どういふ……くそっ！」 魁が叫ぶ。

夢を見ているわけではないはずだ。どんな絶望的なきだつて、必ずこちらに切り札はあるものだ。真人は漫画か何かでそんな言葉を聞いたことがあった。諦めてはいけないということ。

斧男がやってきた。先ほど登った壁はなくなっていて、斧男は素通りしてきたようだ。

「卑怯だな」 真人は呟く。

「おい、さっきみたいにするぞ。どっちかが狙われら、そうじゃないほうが蹴り飛ばせ」

魁の言うことは耳に入っても上手く頭に響かない。全てが無意味に感じてしまう。

舌打ちする。これは条件が悪すぎる。

「いつまでも逃げるな」 斧男が言った。「観念しよう、な？」

「ふざけんな！」魁が返す。

何か武器さえあればいいのに。真人は周りを見るが、特になにもない。

斧男が剣道の上段の構えのように斧を振り上げた。

威圧感。真人は死を覚悟する。

背後から強い音がした。

真人は慌てて振り返った。壁に穴が開いていて、その先から女の姿が現れた。

まさしく、先ほど共同戦線を張らないかと持ちかけてきたあの女だった。

「お前は……？」

マスク越しからも、斧男が戸惑っているのが真人にも伝わった。

「貴方を捕まえるために、やってきたよ」女は言った。「大人しくこの空間を解除しなさい」

「何者だ？」

「貴方と同じ力を使える者。そちらで解除しないなら、こっちでやってもいいけどね」

真人は女のほうから、衝撃を感じた。わからないが、何らかの力が女から発している。それは凄まじい力で、真人は自分が吹き飛ばされるのではないかと思った。

衝撃と共に、轟音。そして、世界が変わっていく。

真人にはすぐにわかった。これは、普通の世界だ。さつきは違った。しかし、今は普通の世界だ。こっちの世界のほうがずっといい。先ほどいた世界は、何ともいえない、嫌な空気の世界だった。

「俺のテリトリーを解除したのか？ ま、あそこに来られただけで普通の人間じゃないことは確かなようだがな」

斧男が言った。真人の見る限り、彼は先ほどの世界にいるよりもずっと矮小な存在に見えた。先ほどはまるで伝説の、話の中の化けものが襲ってきたかのような威圧を感じたのだが、今では本当に、

ただの人間に見える。ただし、斧を持った非道で狂った殺人鬼だということとは変わらない。

「けどどうする気だ？ お前は俺の世界に干渉できるようだが、それだけで俺をどうこうできるとは思えんが」

「確かにね。だからこういうこと。今は互いに逃走のチャンスをあける。ここで私達を殺したら、色々な証拠が残る。それでも貴方は逃げれるでしょう。だけど今まで見たいにのほほんとこの世界に居続けられるとは思わないことですね」

「ふん……小娘が」

女の脅しが通用したのか、斧男は背を向けて真人達から離れていき、唐突に消えた。文字通り、消えてしまった。

灰色の世界

喫茶店に三人は入った。冷房が気持ちいい。真人は魁と、救い主にコーヒーをご馳走した。

一息つくど、どつと疲れが襲ってきた。先ほどのことが現実なのかどうか、何も信じられない気分だった。

少し落ち着くまで、誰もが沈黙を保っていた。やがて疲労感が消えていくと、冷静さが戻ってきた。そろそろ会話を始めるべきだろう。

「こうなったら協力するしかないよなあ、魁」真人が魁の肩を叩く。まるで観念しろといわんばかりに。

「うるせえな」魁は真人の手をふりほどいた。「元はといえば真人悪いんだ。巻き添えにしてくれてさ」

真人は両手について謝罪のポーズをした。

「無理にでも協力してもらうしかないよ。だってそうしないと君たちは惨殺死体になるだけだし。あいつはね、不完全な存在とはいえ、空間を自由に行き来できる。そういう力を持ち、しかも殺人狂という性癖がある。そんな奴は野放しにしておけない。それはわかるでしょ」

「ああ。あんなのにまた襲われたらたまらないしな。で、俺達はどうすればいい？ 大体、空間って何だよ」

「簡単じゃないけど聞いて。説明するね。この世界には自分のテリトリー、つまり自分の空間を持ち、かつそれを自在に操ることができる人間がいるの。その者たちは力の大きさは大小様々で、斧男は中程度の力を持っている。奴は自分の空間を自在に行き来して、表面世界　この世界のことだよ　そして裏世界の間にある中間世界を行き来することができる。中間世界というのはいくつもの薄っぺらい世界が層になっていると思うてくれればいい。混沌しない、狂った世界」

「待った。表面世界がこの世界のことって言ったな。裏世界って？」
魁が尋ねる。

「裏世界はこの表世界とは表裏一体の、鏡のような世界。そこは私もよく知らない。私が多次元の世界に行けるのはせいぜい中間世界の初層かせいぜいその少し先だから。きつと地獄って呼ばれている世界のことを指すんだろうけど、いわゆる想像する地獄とは全く違う、この表世界と酷似した世界なんだって。だけど、世界の異常性は全く別物……ごめん、あたしも聞いた話でしかないからよくわからないの」

「まあいいや。変な世界なんだな」

魁は理解したのだろうか。真人は自分の理解力を疑った。真人にはよくわからない話だった。

「斧男も同じ。中間世界の層を行き来することができる。先ほどの空間も中間世界の一つ。灰色の世界って言われてる。この世界と似てて、自分の思い通りになる世界を呼び寄せて君たち二人を巻き添えに、いや、閉じ込めたって感じかな」

真人にはよくわからなかった。が、真人は女を信じた。女の長い睫にぱっちりした瞳を見ていると、全てを信じていい気になる。

「ええとね、だからね、とにかく、あたしに協力して欲しいの。斧男は空間を自由に行き来するから、さっき見せたようにこの世界から急に消えたり、現れたりができる」

「ドラえもののどこでもドアか、瞬間移動みたいなものかな」魁が言う。

「そんなところかな。だけどあいつの場合は正確な場所に出現することはできないと思う。そこまで正確に空間は操れない。さっきの様子でなんとなくそれがわかった」

「よくわからないけど……たとえば俺の家にいきなり現れて俺を殺すってことは難しいってこと？」真人が尋ねる。

「そういうこと。だけど家を知られたらほんとに終わりだけだね。」

君たちはまだどこの誰か知られていないはず。だけど気をつけて。奴は事件現場で探っている者に目を付ける。だいぶ前に、君たちみたいな探偵ごっこをした者が惨殺されてる」

「……で、俺達はどうすればいいんだ？ 普通の高校生の俺達に、何ができるってんだ？」

「単純な話だよ。斧男を補足するのはあたしに任せろ。そして、斧男と戦って捉えるのを、君たちに任せたいの。あいつは……強い。普通に戦ったら、あたしじゃ勝てない」

それは女だからという意味だろうか。それとも、別の意味があるのだろうか。真人は考える。そういうば、斧男は空間では何でも自在にできる様子だった。壁を作ったり、消したり。もし彼が本気で殺す気なら、二人ともあっさり死んでいたかもしれない。絶対的優位に立っているが故に、あえて獲物をいたぶって遊んでいたのだ。結果的にそれが自分達を救うことになり、斧男の殺人を失敗させることができた。

つまり、もしあのときに武器があっても、斧男が本気だったら、何もかもが無意味かもしれないということだ。

「あいつは自分のテリトリー内ならある程度好き勝手にできるという特殊な力の中でもさらに特殊な力を持っている。中間世界の中の一部に取り囲み、その取り囲んだ部分を好き勝手に構築できる。そんな力だね。あたしにはない力だよ。まあ、今日はいいや。色々なことを一度に説明してもね。二人とも今日は帰ってゆっくり休んだ方が良く。あたしの名前は霧島庸子。今更だけど、以後よろしく」

「俺は守口真人。こっちは江藤魁。よろしく」

女は頷き、携帯電話の番号とアドレスを互いに交換する。魁もしぶしぶ応じる。それが済むと背を向けて、去っていった。

「霧島って珍しい名字だよな」真人はぼんやりと呟く。

「そうか？ ……疲れた。俺はもう帰る」

「俺も帰る。なあ、霧島さんから連絡きたらどうする？」

「知らね」

魁は自転車を漕いで帰って行く。真人は、魁に悪いことをしてしまったかなと心苦しい気分だった。自分が変な考えさえ起こさなければ、魁が斧男の標的にされることはなかった。

二人の異能者

青江柑那は唐突に藤宮市の中央、明野区に出現した。誰もいないのを見計らって別世界からこちらへ戻ってきたのだ。

だいぶ中間世界を散策したが、収穫はかなりあった。斧男の正体にまでは至らなかったが、斧男の痕跡をいくつか発見し、ある程度斧男の住む場所を特定できた。

柑那の読みが正しければ、斧男はこの明野にいる。痕跡は途切れ途切れだが、ほぼ間違いなく、ここに斧男が暮らしているという証拠が揃っている。ここを起点に、斧男は動いている。

柑那は笑いが止まらなかった。体中が歓喜で震え上がり、全身が高揚する。

追い詰めた。もうじきだ。もう、ほぼチェックメイトなのだ。後はこの明野だけを調べ、中間世界での斧男の痕跡を見つけ出すだけ簡単だ。首を洗って待っていていなさい。斧男。柑那はほくそ笑む。

もうじき日が暮れようとしていた。斧男には昼も夜も関係ないが、ここにいるのは危険かもしれないと柑那は思った。ミイラ取りがミイラになるのだけは避けたい。まだまだなめてはかかれぬ事柄だ。今日の所は大人しく帰るとしよう。

中間世界から帰るような真似はしない。多用にあの世界のゲートを開けるべきではない。魔物は厄介だ。そんな世界をむやみに移動したくはない。普通に歩いて帰る。途中、柑那は夜の闇の中に溶け込んでいるかのような女とすれ違った。

なんだか変な女だなと柑那は思う。

女が立ち止まった。靴音が消えたので、それがわかった。柑那も足を止め、なんとなく振り向く。互いの顔を見る。

だが二人は一瞬だけ互いを見たまま、そのまますれ違った。

女は悠然と歩き去り、本当に夜と一体化したかのように見えなくなった。

先ほどまでの爽快な気分が吹き飛び、妙に恐ろしくなった。柑那は小走りでその場を去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5668z/>

白と黒

2011年12月27日22時47分発行